

既卒生における看護師国家試験合格に向けての支援の検討

藤田和加子^{1*}・神戸美輪子²

¹大阪信愛女学院短期大学看護学科・²畿央大学健康科学部看護医療学科

A Study of On-Going Support for Nursing School Alumni to Pass the National Nursing Examination for Licensure in Japan

Wakako Fujita^{1*}・Miwako Kanbe²

¹Osaka Shin-Ai College・²Kio University

Human and Environment Vol. 8 (2015)

Abstract. The aims of this research were to 1) increase knowledge of the extent to which nursing schools in Japan provide assistance to alumni who must retake the National Nursing Examination and 2) investigate the types of assistance needed by these alumni. The background for this research is that 95% of nursing school graduates pass the licensure exam the first time; yet, the passing rate for alumni retaking it is only 40%. Although the ability to pass the exam indicates lower scholastic ability at the individual level, the fact that a nursing school has granted a person a diploma entitling them to take the exam signifies that the school has determined that they have acquired the necessary skills to become a nurse. Therefore, alumni who fail the exam the first time should not be neglected by the nursing educational system, but rather be provided the assistance they need to succeed in obtaining a nursing license.

A survey was mailed to all of Japan's 982 nursing schools to study the extent to which they provided assistance to alumni who had been unable to pass the national licensing exam. The schools were divided into 3 groups, according to their passing rates (below 50%, 50%–89%, and 90% or above), and the groups' survey results were compared using the Kruskal-Wallis test for differences in the types of assistance provided. The results showed that schools with higher success rates provided academic and psychological support. In addition, an analysis of interviews with 8 alumni who were able to pass the exam showed that frequently, friends, faculty, and the mothers of the alumni had been supportive of their retaking of the exam. The themes extracted from the data were encouragement and emotional support from others (*mimamori*), anxiousness (*fuan*), and fellow alumni retaking the exam (*nakama*). These findings suggest that it was the people around the alumni who enhanced their ability to study for the exam.

*大阪信愛女学院短期大学看護学科
〒538-0053 大阪市鶴見区鶴見 6-2-28
E-mail: w-fujita@osaka-shinai-ac.jp

Key words: Nursing School Alumni, National Nursing Examination, nursing license, support

1. 緒言

看護師国家試験（以下、国試とする）は、保健師助産師看護師法第 17 条で定められている、看護師としての必要な知識と技能を求められる国家資格試験である。毎年、約 5 万人が国試を受験し、約 90%は合格するが、残り約 1 割の 5,000 人は不合格となる。新卒者の国試合格率は約 95%あるのに対し、既卒者では約 40%と低く、翌年に再受験をしても合格することはさらに難しい。国試不合格者は多数存在するにも関わらず、看護教育を学校内と看護師免許取得後の教育という範囲でとらえているためか、その要因については明らかになっておらず先行研究はない。

看護師養成所の共通する教育目標は良質な看護を提供できる看護師を輩出することであり、学生の目標も看護師免許を取得し看護のキャリアを成長させていくことである。大日向[1]は、合格率 100%の背景には、看護職を目指してまじめに学習に取り組んできた学生たちの誠実な努力と、教育に多大な時間を割き、親身に指導してきた教員たちの熱意と努力が合格率に結実していると述べている。しかし一方では、時間と労力を惜しんで教育をしても、不合格になると看護師になる夢や目標の喪失によって将来の展望を見失い、フリーターやニートになってしまい、奨学金の返済に困窮する者もいる。前川[2]は卒業単位が認定され国試受験資格が与えられることは、看護師になるためにふさわしい力を身につけたと学校が保証することであると述べている。国試の合否は第一に本人の学力問題であろうが、卒業させた以上、不合格になったからといって学校教育の枠組みから外してしまうのではなく、不合格後も再受験で合格できるように支援していくことも看護教育に課せられた課題であると考えられる。

本研究は、看護師国家試験不合格者に対して、看護師養成所の支援の現状を明らかにすること、またどのような支援が必要かについて検討することを目的とし、全国の看護師養成所に対して質問紙調査を行うと共に、再受験で合格した既卒合格者に対してインタビューを行った。学生インタビューについては、8 名と限られた人数であったが、その結果は質問紙調査の結果を考察するための重要な資料とすることができた。

<用語の操作的定義>

看護師養成所

平成 26 年に国試の受験者を有した、調査時点で閉校していない看護師養成所とする。

現役生

国試を受験する最終学年の看護学生とする。

既卒生

初回の国試で不合格後、再受験する者とする。

既卒合格生

平成 25 年に国試不合格後、平成 26 年看護師国家試験を受験し、自己採点の時点で合格基準を満たした者とする。

2. 研究方法

2.1. 質問紙調査

1) 研究対象

厚生労働省（2014）の「第 100 回保健師国家試験、第 97 回助産師国家試験及び第 103 回看護師国家試験学校別合格者状況」を用いて、第 103 回看護師国家試験を受験した 1102 校の看護師養成所のうち、平成 26 年 4 月までに閉校をしている 120 校を除く 982 校を抽出した。国試資格取得に関して中心的に担当をしている教員宛てに調査の回答を依頼した。

2) 研究期間

平成 26 年 5 月～6 月

3) 質問内容

対象施設について、設置主体、教育課程、国試合格率、国試についての学校の取り組み、国試対策の学習効果、教員の協力の割合などを質問内容とした。またサポート意識、教員から見た学生の学習意欲などの項目については評定 4~5 段階とした。

本研究で分析を行った質問と回答選択肢を以下に示す。統計的分析を行うにあたり、回答選択肢に()内に示す点数を与えた。

(1)既卒生の国試対策で学習効果が上がっている。

回答選択肢<①大変そう思う (5 点) ②ややそう思う (4 点) ③どちらともいえない (3 点) ④あまり思わない (2 点) ⑤全く思わない (1 点) >

(2)既卒生に不安が軽減するような声掛けは必要である。

回答選択肢<①必要である (5 点) ②やや必要である (4 点) ③どちらともいえない (3 点) ④あまり必要でない (2 点) ⑤必要でない (1 点) >

(3)既卒生に不安が軽減するような声かけをしている。

回答選択肢<①している (5 点) ②ややしている (4 点) ③どちらともいえない (3 点) ④あまりしていない (2 点) ⑤していない (1 点) >

(4)既卒生を孤独にしない関わりをしている。

回答選択肢<①している (5 点) ②ややしている (4 点) ③どちらともいえない (3 点) ④あまりしていない (2 点) ⑤していない (1 点) >

(5)既卒生への教員の関わりは合格率に反映する。

回答選択肢<①そう思う (5 点) ②ややそう思う (4 点) ③どちらともいえない (3 点) ④あまり思わない (2 点) ⑤思わない (1 点) >

(6)既卒生に学校として総合的に十分な関わりをしている。

回答選択肢<①そう思う (5点) ②ややそう思う (4点) ③どちらともいえない (3点) ④あまり思わない (2点) ⑤思わない (1点)>

4) 分析方法

国試合格率を基準に既卒合格者を「90%以上」「50～90%未満」「50%未満」の3群に区分しKruskal-Wallisの検定を用いて比較した。なお、分析にはSPSS 21.0J for Windowsを用いて、有意水準5%に設定し統計的処理を行った。

5) 倫理的配慮

畿央大学研究倫理委員会にて承認を得た後、対象者に研究目的と調査内容、研究目的以外では使用しないこと、研究の協力は自由意志であること、調査結果には個人や施設名が表示されないこと、データは厳重に保管し研究終了後に破棄することを説明した。

2.2. グループインタビュー調査

1) 研究対象

予備校に通学していた既卒合格生8名

2) 研究期間

平成26年2～3月

3) データ収集方法

調査の依頼に対して協力の承諾が得られた後、インタビューガイドをもとに半構成的インタビューを行った。許可を得てインタビュー内容の筆記、ICレコーダーによる録音を行った。

4) インタビューガイド内容

国試合格前と不合格前の学習方法、学習意欲の違い、再受験までの心理的な変化、また周囲のどのような支援が嬉しかったかなど

5) 倫理的配慮

対象者に、研究の趣旨を説明した上、参加は自由意思であること、インタビューで知り得たデータは厳重に守秘し、研究終了後に破棄することを説明した。

6) 分析方法

インタビュー内容を逐語録に起こし、データの類似性、相違性を比較してコード化、サブカテゴリ化を行った後、関連のあるサブカテゴリを集めてカテゴリを作成し質的に分析した。

3. 結果

3.1. 質問紙調査の結果

1) 対象施設の属性

質問紙の回収は410校、回収率は41.8%であった。有効回答は既卒合格率の未記入を除く310校で有効回答率は75.6%であった。教育課程は全国の看護師養成所と類似した結果であった。

2) 既卒生合格率別の割合

合格率90%以上は151校(48.7%)、50%～90%未満

は82校(26.5%)、50%未満は70校(24.8%)であった。

3) 合格率別3群間の比較

既卒生に対して国試対策(学習面に関するもの)を行っていない看護師養成所は、310校中65校(20.9%)であり、国試対策の学習効果は、合格率90%以上群が他の2群に比べて有意に高かった(表1)。「既卒生への国試に対する不安が軽減する声かけが必要であるか」「教員の関わりは合格率に反映するか」など全ての項目について、合格率90%以上群が、合格率50%未満群より有意に高かった(表2)。

3.2. グループインタビュー調査の結果

1) 調査対象者のプロフィール

年齢は20歳～40歳、平均年齢24.9歳(±6.2)であった。全員女性であり、卒業した看護師養成所は大学が5名、専門学校が3名であった。

(1)「予備校を勧めてくれたのは誰か(複数回答)」では、学校の先生が1番多く、次に看護学生時代の友達、母親が多かった(図1)

(2)「再受験で支えになってくれた人(複数回答)」では、看護学生時代の友達が最も多く、次に学校の先生、母親が多かった(図2)

2) グループインタビューの結果

インタビュー時間は50分であった。インタビュー内容をコード化、サブカテゴリ化した結果、総コード数は111個、サブカテゴリ数は42個であった。これらをカテゴリ化した結果、【見守る】【不安】【絶対合格するという強い気持ち】【仲間】【学習方法の変化】【気分転換】の6つのカテゴリを抽出した(表3)。

4. 考察

平成15年内閣府による人間力戦略研究会における報告書[3]によると、若年層の人間力低下の原因に「夢もしくは目標の喪失」があり、学校教育では社会における自己実現に向けて、自らの生き方や学び方を教えていくという教育の在り方が重要になっている。

今回の研究結果において、既卒生に対して学習面での国試験対策を行っていないと回答したのは310校中65校であり全体の約20%を占めた。既卒生を合格率別の3群間で比較したところ、「既卒生への国試に対する不安が軽減する声かけが必要であるか」「不安が軽減する声かけをしているか」「既卒生を孤独にしない関わりをしているか」講義や模擬試験で学習効果が上がっているか」「既卒生への教員の関わりは合格率に反映されるか」「既卒生に対し総合的に学校として十分な関わりができていないか」など、合格率90%以上群が50%未満群より高い値を示した。

表1. 既卒生の国試対策で学習効果が上がっているか N=245

50%未満(n=68)	50%~90%未満(n=66)	90%以上(n=111)
M(SD) ¹	M(SD)	M(SD)
3.49(0.68)	3.74(0.79)	4.04(0.64)

*p<0.05 **p<0.01

¹M(SD) : 平均(標準偏差)

表2. 既卒生合格率別の比較 N=310

	50%未満(n=77)	50%~90%未満(n=82)	90%以上(n=151)
	M(SD)	M(SD)	M(SD)
不安が軽減するような声掛けは必要	4.19(0.96)	4.37(0.89)	4.48(0.83)
不安が軽減するような声掛けをしている	3.99(1.05)	4.11(1.10)	4.36(0.93)
孤独にしない関わりをしているか	3.38(1.10)	3.72(1.20)	3.77(1.21)
教員の関わりは合格率に反映するか	3.38(0.98)	3.62(1.00)	3.94(1.00)
総合的に十分な関わりをしているか	3.08(0.96)	3.54(1.03)	3.65(0.98)

*p<0.05 **p<0.01

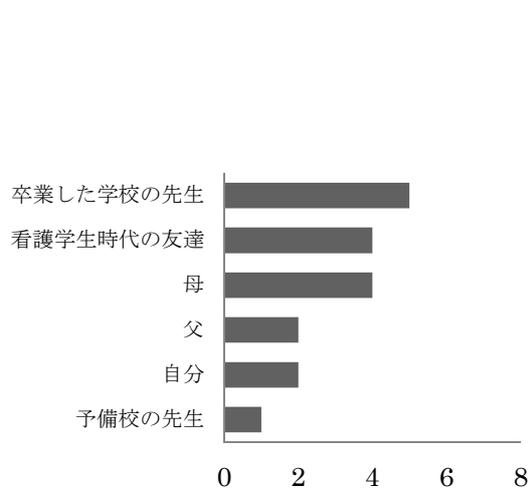


図1. 予備校を進めてくれた人(n=8)

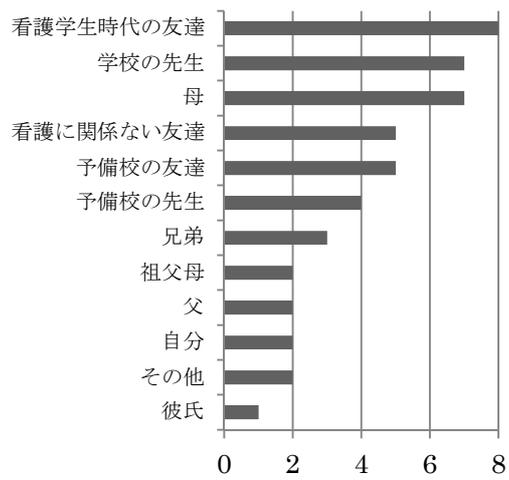


図2. 再受験で支えになった人(n=8)

表 3. 国試験受験までの学習状況・心理的な状態

カテゴリ	サブカテゴリ
見守り	不合格後も学校の先生が気にかけてくれている 学校の先生が自分の性格を考えて指導してくれた 落ち込む時期にはメールや電話で励ましてくれた 模試が受けなくても学校の先生が送ってくれた 学校を卒業しても先生は見ている 合格をした友達と縁を切ろうと思ったが一緒に頑張ろうと言ってくれた 予備校の先生は自信をくれる 予備校の先生は熱くて優しい 予備校に行くと安心できる 親が厳しくしてくれたのが逆に有難かった 親が見守ってくれていた 学校に行ったら邪魔者のような扱いを受けた 学校から全く連絡がなかった
不安	また次も落ちるのではないかという恐怖 去年は自分がわからないことは皆も同じだと思って安心していた 友達は看護師で働いているのに自分は情けない 勉強しているのに模試の結果が悪く不安になった 毎日の勉強が無意味なのではと思った 問題集をしながら合格のゴールはどこにあるのだろうと毎晩泣いた 受験するのをやめようか考えた
絶対に合格するという強い気持ち	絶対合格するという自分を信じる気持ち 絶対合格して皆と一緒に笑いたい 友達のためにも受かりたい 皆の応援に応えたい 同じ過ちをしたくない 開き直りも大切
仲間	予備校の友達が一番の支え わからなかったら皆で教え合う 卒業した学校で現役生や留年生と話して勇気をもらえた 仲間がいるから一人じゃない 友達が応援してくれていた 落ちた辛さは皆同じ
学習方法の変化	わからないことを自分で調べ人に聞けるようになった 問題の内容を理解して解けるようになり楽しくなった 時間の使い方がうまくなった 集中力がついた 勉強をするタイミングが去年より早くなった 去年は自分がわからないことは皆も同じだと思って安心していた
気分転換	落ち込んだときは現実逃避して遊ぶ 友達とご飯を食べに行く アルバイト、仕事をする 子供と遊ぶ 何もせず引きこもる

これらの結果を合わせてみると、既卒生の合格率が高い学看護師養成所ほど学習面、心理面への支援をしていたことが明らかになった。

既卒合格生のインタビュー結果より、【見守り】【仲間】のカテゴリがみられ、仲間の存在は重要であり、不合格後も見守り続けることが学習効果を高めることが示唆された。国試不合格者は、また落ちるのではないかという不安と絶対に合格をしたいという葛藤の中、再受験までを過ごしている。不合格の出来事を知覚するには時間も必要であり、本人が受容でき、以前の

均衡を取り戻した時が、教員の支援のタイミングであると考えられる。合格した友人は看護師として働いている傍ら、不合格者は孤独を感じやすい。不合格後も教員は見守っていることを伝え、今後どのようにしていくことが、本人にとって最善であるのかを一緒に考えていくことが重要であるといえる。既卒生が継続して学習していけるように予備校の勧めや、学内で現役生と一緒に国試対策を受ける際にも教室に入りやすい雰囲気を作ると必要であると考えられる。

また、既卒生は、卒業後は出題基準の変更など国試に関連した新しい情報もタイムリーに入手しにくい状況にあり、情動的サポートも必要である。現役生の教育で教員は多忙であるが、挫折したときにこそ自己実現に向けての生き方や学び方を教えていく教育が重要ではないだろうか。

5. 結論

本研究において、看護師養成所 982 校に全数質問紙郵送調査を行ったところ、既卒生の合格率が高い学校ほど、学習面、心理面の支援をしていることがわかった。また、既卒合格生 8 名のインタビューの結果、再受験で支えになったのは、友人、学校の教員、母親が多く、【見守り】【不安】【仲間】などのカテゴリが抽出され、既卒生への周囲のサポートが学習効果を高めることが示唆された。既卒合格生のほとんどが再受験の支えになっている人として教員を挙げている。これらのことから、教員や仲間は学生にとって精神的な支えになっており、既卒生に対しては、卒業後も見守り不安を支える心理的支援が重要であることが示された。

謝辞：本研究をまとめるにあたり調査にご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

本稿は、畿央大学大学院健康科学研究科提出の修士論文の一部に加筆修正を行った。

引用文献

- [1] 大日向輝美：合格率 100%の背景にあるもの 伝統が育む学習姿勢. 看護教育, 54 (3), 184-189 (2013)
- [2] 前川玉緒：学習リテラシーに乏しい学生に対する国家試験学習の支援. 看護教育, 50 (7), 584-589 (2009)
- [3] 内閣府 人間力戦力研究会：若者に夢と目標を抱かせ意欲を高める信頼と連携の社会システム 人間力戦略研究報告書. 3-28 (2003)

既卒生における看護師国家試験合格に向けての支援の検討

藤田和加子・神戸美輪子

この研究の目的は、看護師国家試験不合格者に対して①看護師養成所の支援の現状を明らかにすること、②どのような支援が必要か検討することである。本研究の背景として、新卒者の看護師国家試験合格率は約 95%あるのに対し、既卒者では約 40%と低い。看護師国家試験の合否は第一に本人の学力問題であるが、卒業を認定され看護師国試受験資格が与えられることは、看護師になるのにふさわしい力を身につけたと学校が認めたということでもある。そのため不合格学生に対しても、看護教育の枠組みから外して行くのではなく、看護師免許を取得するための支援が必要である。

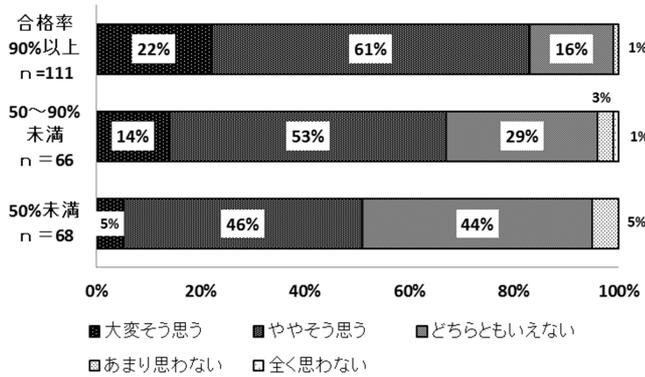
看護師養成所 982 校に全数質問紙郵送調査を行い、既卒生への国試に対する支援の実態調査を行った。また既卒合格者を 50%未満、50%以上 90%未満、90%以上の 3 群に区分し、合格率によって支援の違いがあるかなどを、Kruskal-Wallis の検定で比較した。その結果、既卒生の合格率が高い学校ほど、学習面、心理面の支援をしていることがわかった。また、既卒合格生 8 名のインタビューの結果、再受験で支えになったのは、友人、学校の教員、母親が多く、【見守り】【不安】【仲間】などのカテゴリが抽出され、既卒生への周囲のサポートが学習効果を高めることが示唆された。

論文集「人と環境」Vol. 8 (2015)

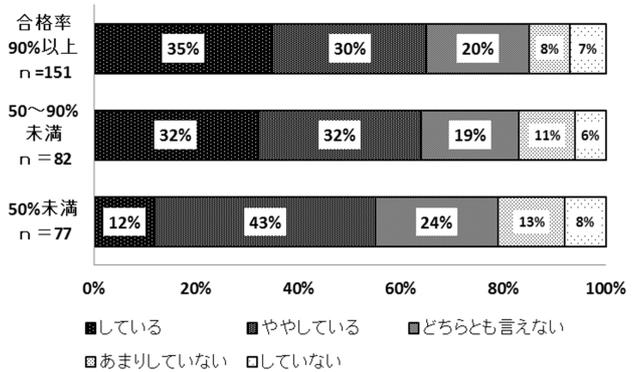
大阪信愛生命環境総合研究所編

【資料】

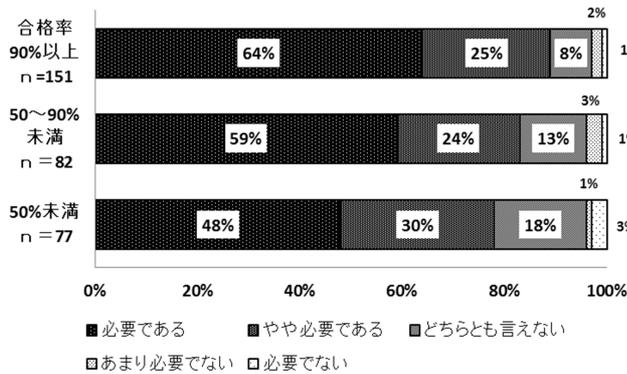
単純集計結果



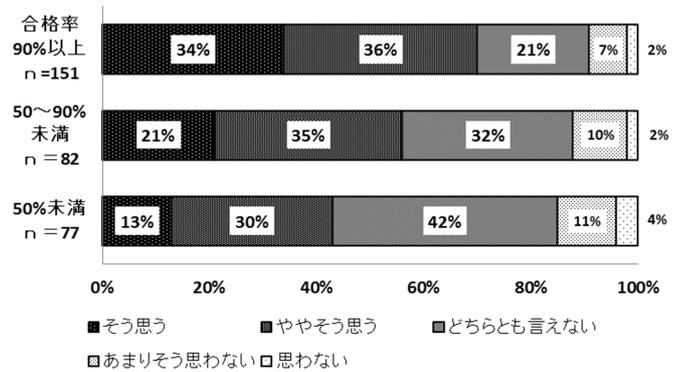
(1) 既卒生の国試対策で学習効果が上がっている



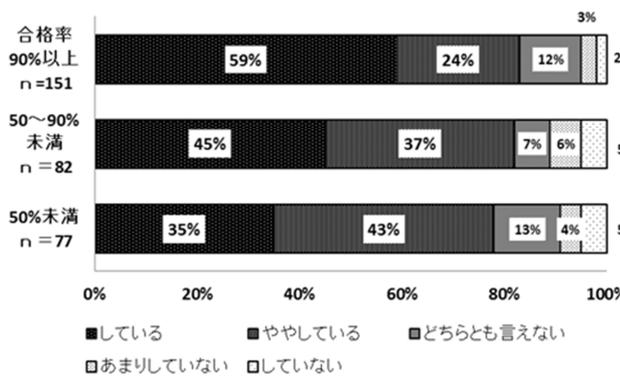
(4) 既卒生を孤独にしない関わりをしている



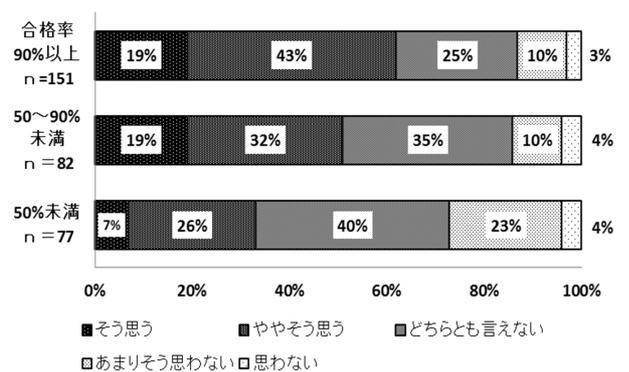
(2) 既卒生に対し不安を軽減する声掛けは必要



(5) 既卒生への教員の関わりは合格率に反映される



(3) 既卒生に対し不安を軽減する声掛けをしている



(6) 既卒生へ総合的に十分な関わりをしている